

中国武術の現在と「道」の精神

Current Chinese Wushu and the Spirit of “Tao”

鄭旭旭

Zheng Xu-xu

中国・集美大学

Jimmei University in China

キーワード: 舞踊、伝統武術、武道、道

Key Words: Dance, Traditional martial arts, Budo, Tao

抄 録

本稿の課題は右の三点である。(1)中国武術全体の概要と最近の問題点を紹介した。(2)中国武術の本質的属性と思われる「戦う」思想的要素を、特に舞踊の「美しさ」との比較において検討した。(3)中国武術の将来について「道」の思想との関係を考察した。各考察内容は以下の通りである。なお、本稿は、訪問学者として早稲田大学スポーツ科学学術院に滞在した 2007 年 1 月に、学部生に対して行った特別講座「中国武術の形式的特徴と精神」の講義ノートを加筆したものである。

1. 教育・研究、学校・国際連盟・選手権、中国武術の三形式(健康武術、競技武術、伝統武術)について紹介した。また、北京オリンピックを巡る近年の問題、特に、競技武術がもたらす弊害及び伝統武術性が蘇る現在の傾向について解説した。
2. 戦国時代の出土品(壺)「燕楽射獵水陸攻戦紋銅壺」の波紋の下に見える人物像を分析し、舞踊と武術の本質的属性の違いについて考察した。
3. 中国武術の身体運動としての多様性は、競技スポーツとして、健康とレクリエーションの手段、また警察官の逮捕術としてなど様々な分野で幅広く応用できる。しかしこれらはあくまでも“応用”の事柄であり、武術の持つ本質は、中国文化のひとつとして「道」を追求すべきだと考える武術家も少なくない。筆者は、老荘の古典、及び中国の古典に見える言葉を用いて考察し、武術の最終目標としての「道」の境地を目指すべきであると結論した。

スポーツ科学研究, 5, 128-136, 2008 年, 受付日:2008 年 2 月 13 日, 受理日:2008 年 6 月 3 日
連絡先: 志々田文明 早稲田大学スポーツ科学学術院 359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15
E-mail: fuzanaoi@waseda.jp

はじめに

本稿の課題は3点ある。第一に、中国武術全体の概要と最近の問題点を紹介した。第二には、

中国武術の本質的属性と思われる「戦う」思想的要素を、特に舞踊の「美しさ」との比較において検討した。第三には、中国武術の将来について

「道」の思想との関係を考察した。本稿は、訪問学者として早稲田大学スポーツ科学学術院に滞在した2007年1月、S教授(武道論)の求めに応じて学部生に対して行った特別講座「中国武術の形式的特徴と精神」の講義ノートを加筆したものである。

I. 中国武術の現在と問題

1. 教育・研究

武術は中国の優れた文化遺産のひとつとして、中国政府によって重視されている。中国教育部が指定する体育学の専攻領域は体育教育訓練学、人体運動科学、体育人文社会科学、民族伝統スポーツの4つである。中国教育部(日本の文部科学省に相当)は11の学問コースを設定している。その一つが教育コース(狭義)であり、その下位に体育コースがある。体育には民族伝統スポーツ専攻が設立されている。大学院には民族伝統スポーツ専攻の修士課程もある。民族伝統スポーツの理論と実技はほとんど中国武術である。中国公立大学の34ヶ所に民族伝統スポーツ学部が設置されており、その内21ヶ所の大学院で、民族伝統スポーツ専攻の修士課程の生徒を募集している。さらに上海体育学院、北京体育大学、華南師範大学の3校には民族伝統スポーツ専攻の博士課程もある。

2. 学校・国際連盟・選手権

中国学者の琪国らの調査によると、2001年、中国では武術団体(校、館、院、社、研究会)は12,000か所があり、7,000人の生徒が全日制の基本教育をうけている武術学校もある(黄淋海、任海, pp.24-25)。中国武術の国際武術連盟には2006年12月現在で106国が参加している。4年に1回の世界武術選手権大会や世界青少年武術選手権大会があり、ヨーロッパやアジアにもそれぞれの地域で4年に1回の武術選手権大会が

行われている。

3. 中国武術の3形式

(1) 健康武術

邱丕相ほか編集、中国武術教程(2003)によれば、現在の中国武術の形式は、競技武術、健身武術(健康武術の意)、学校武術、実用武術の四つに分類される。しかし武術の分類については様々である。そこで本稿では、武術を行う者の志向性から健康武術(大衆が健康志向に行なう武術)、競技武術(専門的競技者が行う武術)、伝統武術(アマチュアが文化伝承として行う武術)の3種類に分けて考える。健康としての武術は太極拳のように、動作がゆっくりで、柔らかくて軽く円を描き、意識が動作を導くことを強調する。精神を集中し、技と呼吸と合わせるといった特徴は、世界中の民衆の憧憬を獲得している。太極拳には動作を簡約化した24式太極拳がある、少し複雑な48式、もっと複雑な85式という套路もある。さらに陳式、呉式、孫式、武式といった風格のちがう様々な拳式がある。剣あるいは扇を使う太極剣あるいは太極扇運動もある。それに、二人が互いに手を組み合わせて、押す、引く、あるいは反撃に対して押すことをくりかえす太極推手も盛んになっている。これは、相手の力を借りて相手を倒す形式の練習方式である。

この十数年間に人気のできた武術に、太極拳によく似た木蘭拳という拳法がある。これは身軽な運動形態の一種で、舞踊のような美しさがあり、女性や年寄り方には魅力的なものである。このような健康のための武術は、主に「老人大学」(生涯学習機関の一種)や都市の公園で展開されているが、沢山の太極拳の習練者が中国体育総局の武術運動管理センター主催の様々な全国太極拳大会や国際太極拳大会によって、いる。その規模は大きく、参加者は多様である。たとえば2003年の3月には海南島の第一回世界太極

拳大会には 14 か国から約 4000 人が集まったといわれる。

(2) 競技武術

競技武術は大まかに套路と散打の2種類に分かれているが、同じ武術と呼ばれる競技であるにもかかわらず、試合場は別々で、出場の選手から、コーチ、審判まで、全て異なる人達によって行われる。

競技武術としての套路は、採点競技として行われている。套路は一般的にいて 40 から 50 個の動作で構成される。演武は、踢（蹴り技）、打（手の技）、摔（相撲）、拿（関節技）の表現を中心とし、跳躍、平衡（片足で様々な姿勢を造ること）、手型、歩型（立つ足の形である）、弓歩、馬歩、虚歩、仆歩、歇歩など各種類の要素を必ず含んでいなければならない。演武の時間は1分 20 秒に定められている。演武場所の広さは幅8メートル、長さ 14 メートルの絨毯で行う。審判が選手の姿勢の美しさ、技の旨さ、力の充実さ、リズムの適当さなどを各角度から見て採点する。2002 年の新しい競技規則にみると、さらに技の難易度による採点が強調されつつある。套路は芸術化されているが、武術形式の表現運動を通して、より強く、より速く、より高く、というオリンピック精神を追求しているともいえる。中国武術の種類は 129 種ある。しかし、大きな競技大会で採用されている套路は、長拳（揚子江委以北の拳）、南拳（揚子江以南の拳）、太極拳の三種類しかない（張山ら,p.36）。

日本の武道稽古法は、形と（乱取り・地稽古・組み手等）の競技の二種類がある。日本武道の多くは競技法を持ち、多くの種目に分化されている。例えば、柔道は二人の者が互いに手で相手の道衣を掴み、投げあるいは固める乱取り競技であり、剣道は互いに竹刀を持って、その打突によって戦う競技である。空手は型の採点競技と打、突き、蹴りを競う「組み手」競技がある。つまり格闘

形態と用いる武器とによって多くの種目に分化されている。

これに対して中国武術は套路（日本の形に相当）が中心であった。套路には、徒手、剣や刀を持つもの（短器械）、槍や杖を持つもの（長器械）があり、これら三つの演武を一つのセットで行う。さらに二人か三人で約束組み手を行なう套路もある。

散打は 20 世紀 80 年代に新興した競技武術である。これは二人で行うもので、互いに徒手で蹴り、打ち、速摔（2秒以内の相撲）を応用して戦う競技である。金的、後頭部、頸への攻撃は禁止されている。また、頭、肘、膝による攻撃も禁止である。胴、金的、歯、頭に防具をつけ、グローブをつけることが規則によって定められている。48Kg から 90Kg 以上までの体重別に 11 ランクあり、幅8メートル平方で高さ 30 センチの試合場で行う。毎ラウンド二分の三ラウンド制で戦う。

1949 年の解放後から、中国では政府により競技スポーツが重要視され、オリンピックの金メダルの獲得者は政府や企業や個人から特別の待遇を受けて顕彰されている。同様に各地方政府は、4 年に 1 回の中国全国運動大会における金メダルの数を現地経済と文化発展レベルの指標として重視している。激励のための様々な政策も創立されて、金メダルに向けての幼少期からの強化訓練、組織化といったシステムを整えている。武術競技のパフォーマンス・レベルも年毎に激しくまた難しくなっている。一般人にとって過度に専門的な武術になったのである。

(3) 伝統武術

中国武術の本流は伝統武術（流派武術）である。伝統武術は一般に競技は行わないため競技ルールがもたらす弊害は少ない。伝統武術は数人で小さいサークルを作り、公園や庭などで練習している。一方、北京の馮志強の“混元太極拳研

研究会”、河北の孟村の“八極拳研究会”、河南の“陳式太極拳研究会”のような大きい団体によって行われる場合もある。伝統武術は長年にわたり存在しているが、時期によって盛衰がある。伝統武術に携わっている人達は、全国あるいは地方の国民運動大会で金メダルを争うことを目標とはせず、套路(形)、対練(約束組み手)、散打(自由組み手)を全て練習して、その中身を味わっている。これは教養としての中国武術といえる。

4. 近年の問題

解放後の新中国政府は、平和で安定的な社会においては、闘うことを想定した武術の存在価値は低いという判断から、青少年の身体能力と美しさを競争価値とした現代の競技武術を推進してきた。その傾向は長く続くが、1990年代の後半には北京オリンピック開催の意志を明確にしたことから、競技武術志向は拍車がかかった。

一方、競技化がさまざまな問題点をもたらしたことから、1980年代に、国家体育総局の武術運動管理センターは、“全国武術観摩[演武]交流大会”をしばしば主催し、全国の各地のそれぞれの流派の達人を招いて演技をさせた。全国の伝統の武術を発掘し整理するためであった。中国国内の学者は、競技武術の方向性について様々な批判を展開し、最近では、体操化、舞踊化の傾向を色濃くした武術を止めようとする見解が強くなっている。筆者自身、日本武道の友人から、「武術は舞踊ではないか」、「武術は雑技ではないか」という質問をうけたことがあるが、見せるための派手に演技したりする華法化が問題となっているのである。

太極拳は、近年、競技武術がもたらす弊害(誇張や、非実戦性、危険性)から、競技武術から離れる傾向にあり、各種の流派の伝統武術も同様の傾向を見せ始めている。ある地域で盛んであった武術が競技武術から離れ、段々と世界

各地に伝播していき、伝統武術性の蘇る傾向が現れている。

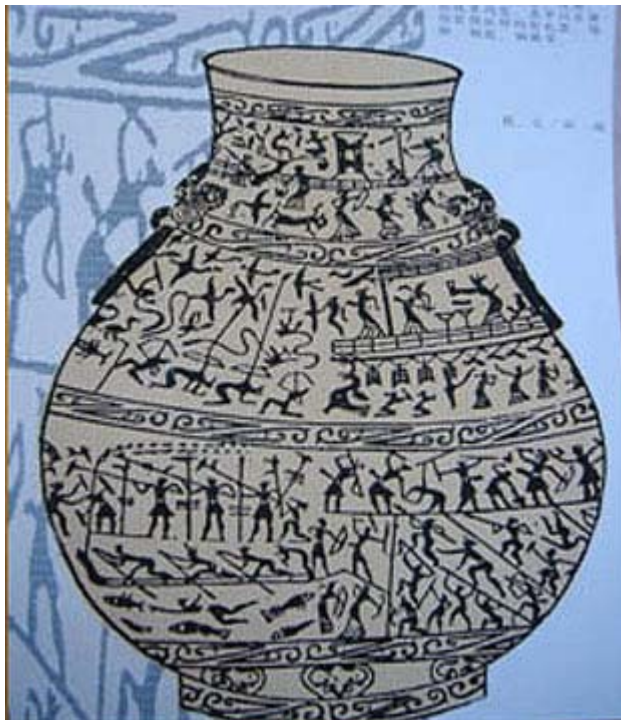
II. 中国武術の本質的属性: 武術と舞踊

図1(編集委員会, p.44)の左は、中国戦国時代(公元 221 年前)の出土品(壺)「燕楽射獵水陸攻戦紋銅壺」(北京・故宮博物館所蔵)である。壺の中央を横断する波紋の下に見える人物像は、左の二人は矛と盾を持つ武人、その右三人は矛を持って攻める姿をしめし、その右の武人たちは、武器を持って斜面を駆け上がる武人たちを槍や弓、剣を持って防戦している人々の姿を示している。波紋のすぐ上に見える人物像は、右から二つ目は舞踊の一表現であろう、その左の六及び九番目の図は弓を引く武人であろう。舞踊の図の上は船に載った三人の姿を描いている。戦後の宴であろう。右の者は杯を差し出し、真ん中の者は剣を押さえ返って振り返った姿であろう。その上の波紋の上にも中央付近に弓や剣を持った武人の姿がみえる。以上から、武術学者はこの壺絵を武術の起源の証拠としている。一方、舞踊史の専門家はそれを古代舞踊の表現態として考えている。そこでは武人たちも武を舞う人と見なされている。

右の2枚の写真では、武術か舞踊かの判断は容易である。身体姿勢はよく似ているが上の写真は舞踊である。片足で地面を支えて少し立ち上がり、もう一方の膝を高く上げて、右の手は充分にまっすぐ伸びて、前方を打っている。この写真の演者は現代舞の演目「秋瑾」(舞踊, p.15)のスクール写真である。秋瑾は清末に日本に留学し、その後、清朝に一揆した人物であり、現代女侠としても言われた。下の写真(邱丕相ほか編, p.167)にあるその演技者は、中国で優秀な選手といわれる胡宝林であり、伝統的な通臂拳の技を披露している。両者の違いはどこにあるのか。

舞踊は一般に生活舞踊と芸術舞踊に分類で

図1: 武術と舞踊の姿



きる。生活舞踊は祭りごとや日常生活で感情を表出するものをいう。他方、芸術舞踊は、主に主題、人物、ストーリーで構成されている。同じ身体の動きであるが、武術の身体技法が「戦う」ことであるのに対して、舞踊の身体技法の中心は「美しさ」である。舞踊は一定の空間と時間内のなかで、連続的な身体動作を通して、簡潔で洗練された姿態が表出される。このような芸術的な動きを通して生活を表している。そして場面が音楽および舞台美術（服装、背景、灯、劇用道具）に結びつく。それによって舞踊者の感情を表現し、観客の気分を高揚させ、美意識を育て、養成する効果が期待されるのである。

一方、武術の表現形式は、套路、対抗、功法（技の速さ、強さ、巧みさなどを向上する補強練習）の3種類に分類される。武術は一種の身体動作であり、舞踊の持つ主体やストーリー性はなく、人物、事情、環境、雰囲気などの要素は含ん

でいない。身体運動を通して戦う技巧を表現する。技の合理性、動作の速さ、敏捷性、タイミングを取る旨さ、力の強さは武術の身体表現のキーポイントである。例えば、一人で練習する場合においても、敵が存在しているかのように振る舞う。中国武術に“手无空出，招无空回（手を出しも収めるも、全ては攻防の技である）”という格言がある。もし武術が舞踊化すれば、表現力に関しては舞踊に及ばず、武術の伝統的独立性も失うことになるだろう。武術の本質は合理的に“戦う”ことなのであり、武術と舞踊はそれぞれの本質的属性を維持すべきであろう。

しかし、平和を希求する国際社会の中にあつて、中国武術は、「戦う」という属性を維持することのみでよいのであろうか。中国伝統文化のあり方としてのそのような形式でよいのであろうか。以下に、この問題を考える。

Ⅲ. 「道」としての中国武術

武術は元来戦いの手段であるが、武術の表現方式は時代によって、特に近代になって変化してきた。武術の種類は多彩である。武術の身体運動としての多様性は、適応性の広い原材料のように、競技スポーツとして、健康とレクリエーションの手段として、また警察官の逮捕術としてなど、様々な分野で幅広く応用できる。

しかしこれらはあくまでも“応用”の事柄であり、武術の持つ本質は別の所にある、と考える心ある武術家は少なくない。彼らは、中国武術は中国文化のひとつとして「道」を追求すべきだと考えるのである。

「道」という概念は、最初に老子の「道德経」にある(金谷治,p.43)。老子の「道德経」の「道」には二つ意味がある。一つは「最初、最高」である。「物有り混成し、天地に先んじて生ず。寂たり寞たり独立して殆わらず。周行して改らず。以て天地の母となすべし。吾れこの名を知らず。これに字して道と曰う」(金谷治,p.65)とあるように万物の出発点、絶えずめぐり来るものの意味を通して最高であることが表現されるといえる。もう一つは「規律、原理」である。事物が従うべき法則である。「道」という字は元来人の歩く道である。字の成り立ちから考えると、真ん中の“首”という字は発音の記号であって、しんにゅうは道路をかたどったものであるから、元来は人の歩く道を意識した字である。それが抽象的に考えられるようになり、人として守るべき道というような行動あるいは実践の規準となった。

さて、中国では古来より道を自然として理解してきた。これを「道法自然」という。自然にはさまざまな事物が無限に存在し、それらは絶えず変化している。人間も自然に学び、自然に適応してきた。武術も道を求めて同様に自然に従って技も変化している。中国武術の長拳(查拳、華拳、少林拳)の総称で、姿勢や動作が大きく伸び、上がって蹴

り、動きの動静が明確である点に特徴がある)に24要(24ポイント)がある。24要は4撃すなわち踢(足技)、打(手技)、摔(すもう)、拿(関節技)、8法すなわち手、眼、身、歩、神、気、力、功、そして12型である。12型は全て自然界に学び、模倣し、自然の形を追求するものである。“鐘のように座る(坐如鐘)、松の木のように立つ(立如松)、猿のように起きる(起如猿)、カササギのように落ちる(落如鵲)、大川の流れのように動く(動如涛)、大山のように落ち着く(静如岳)、車輪のように回る(転如輪)、弓のように張り強く折れる(折如弓)、葉のように軽い(軽如叶)、鉄のように重い(重如鉄)、風のように速い(快如風)、鷹のように鷹揚する(緩如鷹)”ということである。このように実践することが「最高」のこととして評価する文化的環境が中国武術界にあるからである。

武術の「道」の境界は「庖丁解牛」である。庖丁(料理人)という人物は、牛を解体するのに、手で触り、肩で寄せ、足でふんばり、膝立てして行った。各動作に応じて、さくさく、ぱりぱりと音が生じ、牛刀の動きに応じて、ざくりざくりと音が響きわたったという。それが見事な調和を得ると、まるで名曲を聴く想いがするという。庖丁は「私の求めているのは道であって、技より以上のものだ。始め臣(庖丁)の牛を解く時、見る所牛に非ざるものなし。三年の後、未だ嘗て全牛を見ず。方今の時、臣は神を以て遭いて、目をもつて視ず。官知は止めて神欲行なわる。天理に依りて、大卻を批(撃)ち大竅に導い、これの固然に因る。枝経肯綮にもこれ未だ嘗みず」と文恵王に言っている。ここでは、庖丁の牛を解く腕は、技ではなく道であるとされ、最高の境地とされたのである(舞踊,p.240)。

次に「道」における「気」の問題を考える。気とは「天地間を満たし、宇宙を構成する基本と考えられるもの」(『広辞苑』第五版)と理解される。「気」は中国武術では特別な意義をもつ。武術の技法に関して、「外は筋、骨、皮を工夫して、内は気を錬

る」という格言がある。たとえば、長拳の気(呼吸)の運行には提(引き上げる)、沈(降ろす)、集(あつまる)、托(ささえる)がある。また、太極拳でも、気の運行を特に重視する。精神と身体と気を調整することを通して、肢体の末まで気を送り届けようとする。気の運行は健康を重視する太極拳のポイントとなっている。しかし、これらの「気」の運行は単に「技」のレベルにすぎない。「道」の気は呼吸を調節することではなく、「浩然の気」を養うことである。「浩然の気」とは「天地の間に満ち満ちている非常に盛んな精気」(『広辞苑』第五版)。孟子によれば、それは「至大至剛にして」、「天地の間に」満ちており、それを持つ人間は「富貴も淫する能はず。貧賤も移す能はず。威武も屈する能はず」といわれるほど重要視されている(諸橋徹次,p.248)。

ではこのような「道」、つまり「浩然の気」を養うことは、中国武術の場合、どのようなプロセスを通して可能なるのであろうか。これについて中国の武術家の優れた人々は様々な実践を行ってきている。以下にそれらを四点にまとめて、中国の古典に見える言葉を用いて簡潔に説明したい。

1) “自彊不息”は、「天の運行は健やかである。君子は、これを則って、自分からつとめはげんで息[や]むとときがないのである」(赤塚忠,p.375)その運行は“常に働いて”、“一生懸命に”と言うことであり、毎日コツコツと実践することの大切さを述べた言葉である。天体の運行は止まることなく順調に進む。人は一生懸命にやれば社会と他人に貢献できる。学問の場合は、孔子が、「学んで厭わず、人に誨[おし]えて倦[う]まず」、また、「憤りを発して食を忘れ、楽しんで以って憂いを忘れ、老いの將に至らんとするを知らざる」と語るように、熱意をもって頑張ることが奨励される(吉川幸次郎,p.208,p.230)。武術の場合は、“拳不離手(いつでも、どこでも練習する。)”、“夏錬三伏、冬錬

三九(一年で一番暑い時期である‘三伏’にも、一番寒い時期である‘三九’にも休むことなく武術の練習を続ける)”ことが求められる。少林寺の武術に“立つ、歩く、座る、横になることなど全ては仏を拝むことで、水を運ぶことも薪を割ることも全て武術の修行である”という教えがある如くである。

2) “厚德載物”は、「地の勢は、坤である、君子は、これに則ってその徳は厚くして人々を包容するのである。」(吉川幸次郎, p.239)という意味である。つまり大地同様に胸襟を大きく開いて異種の事物を受容することである。中国文化は異文化に寛容する文化といわれる。唐代の中国は西アジアから多種多様な文化を受容した。“胡弓”、“胡舞”の言葉、その時代に“胡人”が長安の役人になって活躍したことである。「シルクロード」は異なった文化が交流する融和の道であった。仏教文化はインドから中国に流入し、中国文化では不可分の部分となって、日本仏教に多大の影響を与えた。

翻って中国武術を考えると、太極拳の創始者の陳王庭(1600-1680)は伝統的な経絡学説を借用し、“陰陽”の哲学理論と戚繼光「紀効新書」の32式を結びつけて、陳式太極拳を創っている。

また、近代の著名な武術家の馬鳳図(1888-1973.出身地は河北省滄州県)は、「武術を教養として文通武備という「通備拳学」という武術を作った。彼は1911年、天津で形意拳の名家李存義と一緒に中華武士会を作った。後期に中国の西の蘭州に常住した。その武術の技法は出身地の八極拳と劈掛掌を中心とし、東北の番子拳、戳脚と西北の杖術も受け入れている。ここにも中国文化の異武術に対する寛容性を見ることが出来る。

3) “和合相生”は、「易経」の剛毅が中に、柔和

が外にあって、和合して悦ぶ、吉であるという思想からくる(赤塚忠,p.424)。その意味は天地のはたらきが適時適宜さを得て、万物が順調にすすむということである。物事が成功する時の条件として、天の時、地の利、人の和という事がいわれる。天の時と地の利とは、自然界を尊重し、天地の働きにうまく合わせていくことをいう。人の和とは、他人を尊重し、武を通して友達を作り、他人の長所を取り入れて自己の短所を補い、共同で向上することをいう。中国武術の各流派の風格は大いに異なっているが、激しい八極拳、柔らかい太極拳、跳び上がる長拳、落ち着いている南拳が共存しており、共生が成り立っている。

武術についていうと、「内三合」、「外三合」という格言がある。「内三合」は心と気と力を合わせることであり、「外三合」は肩と股、肘と膝、手と足を合わせることであり。左右、前後、上下を調和して、様々な動きが順調に流れて、融通無碍の動きの獲得が善しとされる。

4) “生生謂易”は、「生々する[生々して息むときがない]、これを易[変化、創造]という」(赤塚忠,p.420) の意味である。易(変化)は万物の発生、展開を保障する事からであるが故に、変化、交流を重視することで、これを易経では自然現象の理想的状態として、泰(陰と陽とが十分交流しあう状態)と名をつける。中国武術の格言では、「継承して発展し、古きを退けて新しきを出す」という。中国近代武術史において、楊式太極拳は、陳式太極拳から派生したものである。また“意拳”の創始者である王郷齋は、伝統的な様々な形から分派して、武術の様々な種類を創出する中国武術の生産システムの枠組から脱出して、“站桩”(立禅)、試力(力を試る)、試声(声と技とを合わせる)、試力(力を使う)、“摩擦歩”(運足)、推手、散手(自由組み手)”7種の技法から構成される“意拳”を創った。この「意拳」も一種の変容

したものといえる。

IV. 結論：道を求めて

以上、四点を別言すれば、「克苦勤勉」、「異文化への寛容」、「自然と人間との共生」、「変化、創造」と置き換えることができよう。中国武術の将来は、伝承されてきた中国文化の伝統に学び、それを自覚化して、発展させることにかかっていると考える。

中国の優れた文化は、武術の分野に十分に表現されているとも言える。社会の発展に伴い、人々の観念も変化しつつある。現代の中国社会は科学技術が急速に発展し、法律の整備も同様である。法治国家において武術の「戦う」価値はほとんどないに等しい。しかしながら、武術に内在する上述した文化性は伝統文化の一つとしても、教育、体育に教材としても活用可能であろう。たとえば太極拳の世界普及に見られるように、広く世界の人々の健康への貢献には大きなものがある。武術の表現の形式は、多種多様であり、現代の人たちは武術を通して様々な目的を達成することも出来ると思っている。身体文化としての武術の特性と意義は、たしかに元来は合理的に“戦う”ことであった。しかし、中国文化としての武術の最終目標は「道」の境地に到達することではないか。中国の舞踊家、書道家らは、各自の分野を通して「道」の境地に到達できるように努力してきているが、武術の「道」への追求と“異路同帰”といえよう。

武術家が武術の伝承、練磨、伝播を通して最高の境地の「道」を追求したとしても、その「道」の境界に到達することは困難である。中国明代の哲学者王夫之は「高山仰止、景行行止、雖不能至、心向往之」(高い山は見るほど高くみえる、素晴らしい人格は実行するほど素晴らしいになる。そのような境地までは行けないかもしれないが、ずっとその目標に向かい、一生頑張ろう)と述べてい

る。この言葉の実践に中国武術発展の将来がかかっていると考え。

文 献

- ・ 赤塚忠(1987) 書経・易経, 平凡社.
- ・ 舞踊, 舞踊雑誌社:北京, 2004.
- ・ 張山ほか (1998) 中国武術百科全書, 中国大百科全書出版社.
- ・ 編集委員会 (1998)中国武術図典,人民体育出版社:北京.
- ・ 金谷治 (1988) 老荘を読む,大阪書籍.
- ・ 黄淋海, 任海 (2001) わが国民間武術学校を調べる, 体育科学(6):北京.
- ・ 邱丕相ほか編集 (2003) 中国武術教程(上) 人民体育出版社:北京.
- ・ 諸橋徹次 (1988) 孟子の話, 大修館書店.
- ・ 吉川幸次郎 (1978) 論語上, 朝日文庫.